



からこかぎ

第36号 令和4年7月10日(日)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 050-3719-0559

Email: kksien_2004@yahoo.co.jp

はじめに

ムクロジの今昔

折阪 伸治

ムクロジが支援隊のメニューになって日は浅いもの 皆さん方のご協力で少しずつ知られるようになって来ました。今までの行事に配布していたムクロジ紹介パンフレットにプラスアルファとしてムクロジの今昔をお知らせしましょう。

1. ムクロジはマイナーではない：

植物の分類は遺伝子解析で以前とは異なった分類になり その中でムクロジはムクロジ目/ムクロジ科/ムクロジ属となります。なんとウルシ科・トチノキ科・カエデ科・ミカン科・センダン科・ニガキ科などはムクロジ目の代表です。日常によく見かけるマンゴー・カシュー・ミカン・カエデ・トチなどはムクロジ目です。たとえば、“大きいお役所・会社の組織の部長さんクラスと結構偉い” のです！

それにムクロジの学名は “Sapindaleo **Mukorossi** Gaertn であり日本語があるのも親しめます。

2. ムクロジの植生：

ムクロジは暖地系落葉樹で東アジアから日本では関東地方以西に植生地があり 奈良県には私が現地確認しただけで115サイトあります。その約70%が神社/社叢にあります 山に自然に生えているのも散見されます。例えば吉野川の源流で とても人が植えたものでないことが判る場所に実を付けたムクロジが散見されます。

このことは縄文 弥生時代のムクロジの植生状態にヒントになるでしょう。例えば 国内各地の縄文遺跡ではムクロジの樹が検出され 更にムクロジで作った道具類が出土していることから 人が住む場所にはムクロジの植生があったこととなります。奈良県の縄文遺跡3ヶ所でも確認されており 唐古・鍵遺跡の周辺でもムクロジがありふれた状態だったと推定されます。

現在奈良県下でのムクロジ群生地3サイトがやや自然で昔の状態を示している様に観察出来ます。

*奈良市春日山原始林南側 約300本 ただし鹿しか入れない

*天理市永原御霊神社 約15本 神社境内・周辺

*明日香飛鳥川上坐宇須多氣比売命神社 成木/幼木群生、落果(裸小珠)境内苔の緑 (写真次頁左)

3. ムクロジの古木：

奈良のムクロジ古木は御所一言主神社(樹齢650年)、春日大社参道、高田根成柿天満神社 吉野坐山口神社などが古木のパワーを感じることができます。

一方、県内では近年神社社屋に近接するムクロジ古木が年1件くらいのペースで伐採されています。近くでは田原本西竹田八坂神社もその危機が迫っておりますので 対策が必須でしょう。

高田天満社鳥居直ぐの老木（写真本頁中）です、幹の内側は完全空洞 しかしまだ毎年実を付けています。なんと空洞内には2年目の幼木が育っているのも楽しみです。

ムクロジは伐採されても翌年から側枝が成長、実がなる小枝もあります、まさに老兵は死なず さらに年輪から樹齢が推測できます。。

*大淀町土田八幡神社・明日香村於美阿志神社、川西町糸井神社、橿原市本薬師寺など

4、ムクロジで作るもの：

ムクロジのつくり物は正月遊びの定番 “羽根つき” と仏事数珠（ブレスレット）です。数珠はおしゃか様も使ったとか 今どきは高価な宝石類を使ったものが一般的、通販ではホンモノ数珠として数千円で売られているものもあります。

日本でも仏教伝来から数珠が使われており ムクロジも確かに使われていたことは記録・古文書にてわかります。はっきり無患子の珠を使ったとあるのは“今昔物語 12 巻 34 にある 姫路書写山の性空聖人が祈禱する際 ”…木連子の念珠の砕くばかり揉みて・・・”と体力を使ったお祈りにも使ったようです。

羽根つきの珠 ムクロジは丸い・硬い（殻厚み2mm）・殻は炭素繊維製並みで強く100Kg 荷重にも耐え反発係数が大きく ピンポン珠には劣るものの良く弾きます。

しかし珠は所詮発芽する使命があり この強い殻を開かねばなりません。ぜひ春先までに珠を植木鉢に埋め 2~3ヶ月後のハッチを明けた発芽状態を観察してみませんか。

5、ムクロジの楽しみ：

無患子の名前が縁起よいのか 俳句など文学作品にも散見され 俳号/柳号も、お菓子の名前、居酒屋、保育園、地名、などなど 私も便乗し カメラにストラップ2個を付け“無患翁”なんてペンネームを使っている次第です。（写真右 唐古・鍵遺跡史跡公園 植栽ムクロジ）

俳句のムクロジは秋、晩秋ムクロジの落果を拾い振るとカラカラと音がしますが これは虫入り珠の場合音無し、アシプトヒメハマキなる蛾が好んでムクロジに侵入するのです。

“からびたる 黄のむくろじを拾い持ち 歩みゆく吾の手のうちに鳴る”（塚本富美子）

6月中旬以降 奈良ではムクロジの黄色い花が咲き 樹の下は黄色の絨毯状、皆さん方も近くのムクロジの花見 観察 採集してみませんか。



遺物紹介～銅鐸形土製品

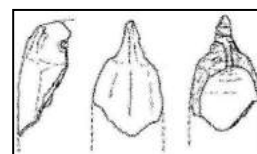
1 銅鐸との違い

今回は、ミュージアム第1室の「まつりといのり」コーナーに展示されている「銅鐸形土製品」を紹介します。まつりに使われた道具として人形・動物形・鳥形・分銅形土製品・ミニチュア土器などと並んで銅鐸形土製品が3点展示されています。遺跡からは19点ほど出土し、発掘が進んでいる南地区（9点）や西地区（5点）の集落域からの出土が目立っています。

銅鐸形土製品は、小銅鐸や銅鐸の形を模した小型の土製品で縄文時代にみられない遺物です。北部九州や近畿地方や東海地方に多く全国的には180点以上出土しています。舌状土製品（扁平な棒状の粘土製品上端を平坦にし穿孔打ち鳴らし具？）と一緒に出土した例もあります。鐸形土製品の多くは井戸や柱穴など集落内から出土していて、集落から離れた山腹などから出土する銅鐸と異なっています。そこから、銅鐸形土製品と銅鐸を使用する祭祀の違いが想定されています。



なお、縄文後期に東北地方北部を中心に鐸形土製品（右上写真 秋田県鹿角市大湯環状列石出土品）が出土しています。中空で開口部が楕円形の高さ5cm程度の小品ですが、呪術的文様があり内面には煤状の付着物がみられます。銅鐸形土製品とは少し異なっています。



2 小銅鐸を模した土製品

3点の展示品は、文様の有無や形状の違いに着目すると小銅鐸と銅鐸を模した土製品とに分類できます。近畿では、寝屋川市高宮八丁遺跡の井戸跡から鳥形木製品とともに出土した中期前半の銅鐸形土製品（右上 残欠模式図 舞の中央に1孔）が最古級と考えられています。注目したいのは、鱈（ヒシ）や文様はなく、朝鮮半島の小銅鐸と類似しています。

(1) 半島系の土製品 唐古池東側内堤工事に伴う23次調査区の中期中葉後半の井戸遺構の最下層から出土した暗褐色の銅鐸形土製品（右模式図 展示品右端）は、鱈が表現されてなく無文ですので朝鮮半島系の小銅鐸（注参照）を模した土製品です。残存幅1.7cm 高さ4.0cmの残片で他の土器片と一緒に出土しています。粘土板（粘土紐でない）を巻いた円筒状の鐸身の残欠部で、鈕部の周辺の上部2箇所には刺突孔の残存痕があります。南地区の69次調査からも鱈の無い無文の鐸形土製品が出土していて中期後半の土製品です。この時期は、南地区を中心に青銅器関連遺物が多く出土しています。また、橿原市四分遺跡の後期の溝からも赤色顔料で着色された無文の銅鐸形土製品（右写真左側 高さ6.9cm 幅3.9cm）が出土しています。無文土器や絵画土器の残片との識別が難しい銅鐸形土製品ですが、小銅鐸を模した土製品の様子がよく分かる優品です。



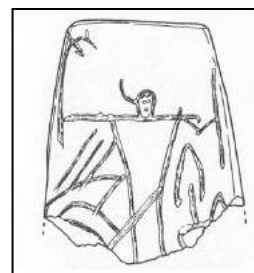
3 袈裟襴文銅鐸を模した土製品

(1) 袈裟襴文 西地区93次調査の後期後半の井戸遺構から2片（展示品中央）が出土しています。色調や胎土厚は異なっていますが同一遺構からの出土ですので「唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅳ」では同じ個体の残欠と考えています。上部残片と考えられている1点（右上写真）は、高さ4.6cm 幅3.3cmで、下部残片（右下写真）は高さ2.3cm 幅2.7cmです。一般に、銅鐸の身部の文様は、①横方向に区画帯を配した「横帯文」と②縦横に区画帯をめぐらした「袈裟襴



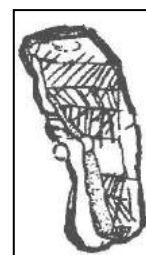
文」と③平行直線文を屈曲反転させる「流水文」の3種に分類されます。出土した上部残片には、斜格文の僅かな横帯と縦方向の線刻が確認でき袈裟襷文銅鐸を模したものです。上辺にはシカの角の部分(?)が描かれていて、区画帯の装飾文様に絵画文様が付け加えられています。また、下部残片には斜格文らしき横帯とその下に鋸歯文(同資料目録Ⅳでは右向きの魚と想定)が線刻されています。多くの袈裟襷文銅鐸は、身部の下部は横帯(下辺横帯)で区分しその下(裾部)には文様は施していませんが、この下部残片は魚のような鋸歯文が線刻されています。

(2) 絵画文様 西北九州は、佐賀平野を中心に30例ほど銅鐸形土製品が出土して最も濃密な分布域です。絵画文様が線刻されている銅鐸形土製品は、全国的に少なくても10例に満たないですがやはり西北九州に多く発見されています。その中でも著名なのは、佐賀平野東部の神埼郡川寄吉原遺跡(東方2kmに吉野ヶ里遺跡)の後期前葉の柱穴から線刻面を上にして発見された銅鐸形土製品(右下写真)です。報告書によると、現状長7.2cm(復元長15cm)の釣鐘状で内面は空洞で表面はやや丸みを帯び裏面は平らです。中央に人物(目鼻口を描く)頭部は長髪を結び(トリの羽とする意見有り)右手に戈をかかげ左手には楯を持ち両方に動物(左はイノシシ右は頭部)を配しています。腰には刀を持ち一方には小銅鐸を吊るした祭祀を執行する逆三角形の人物を描いています。



唐古・鍵遺跡でも南地区の44次調査の中期後半の溝から線刻された銅鐸形土製品が出土しています。紐と身の残片で鱗が付着していますが、横帯文の外側に両手を広

げ両足を広げた人物がごく浅く線刻されています。横帯文と比べるとかなり不鮮明な描写で絵画土器の下書きのように薄く残っていて、横帯文を先に描いた後に描かれたものです。清水風遺跡第2次調査出土の「楯と戈を持った人物像」の絵画土器と類似しています。この人物表現は、第一次調査で北方砂層から発見された三角形の人物を描いた土器にも見られます。



4 横帯文銅鐸を模した土製品

西地区13次調査の中期中葉の溝から出土した横帯文銅鐸を模した銅鐸形土製品(展示品左端)で残存高5.3cm幅2.5cmです。縦半分の身部の残欠で鱗がかすかに付いています(右上模式図)。横方向の区画帯(横帯文)は、表裏面には2帯・3帯を表現し斜格文・綾杉文の文様を配しています。明らかに横帯文銅鐸を模したものです。袈裟襷文の銅鐸は外縁付紐銅鐸以降に多くみられますが、横帯文の文様を配する銅鐸は菱環鈕式に多く見られます。銅鐸の出土数が少ない奈良県下では横帯文の銅鐸は少なく、名柄銅鐸は身部の一面は流水文、一面は斜格子文の横帯で三段に区画されていますが外縁付紐銅鐸に分類されています。このように銅鐸を模した土製品であっても必ずしも銅鐸と一致していないことが分かります。それは、冒頭に述べたように銅鐸と銅鐸形土製品の出土位置の違いから前者は集落の祭祀、後者は家族の祭祀と違いが想

定されています。銅鐸形土製品は、冷涼化が進む中期後半から集落が分解する後期にかけて多くみられます。

5 祭祀具

祭祀は、精霊や祖霊や神などに関わる宗教的活動で、願いや畏れや喜びなど様々に感情（祈り）を内包しています。稲作が伝来した弥生時代では銅鐸や武器形青銅器が農耕祭祀の道具（祭祀具）となり、銅鐸は集落の祭場（広場）に神霊を招く「招霊用祭具」となりました。一方、縄文時代は自然の恵みに依拠した採集生活だったので自然界に霊威を感じ祈っています。弥生時代にも石棒や独鈷石や人形土製品など前時代から継承された祭祀具があります。それらの一つとして銅鐸形土製品も銅鐸の影響を受けつつも家族が持つ祭祀具として使用されたものと思われます。ミュージアムの「まつりのコーナー」には多様な祈りの道具が展示され、その多くは縄文時代の祭祀具の流れを引くのが目立ちます。唐古・鍵遺跡の場合には、他地域と異なり銅鐸形土製品の数も多く出土し祭祀を重視した遺跡の特徴がよく表れています。なお、奈良県では銅鐸形土製品は中期中葉後半から後期前半に多く見られ、清水風遺跡(3)、大福遺跡(2)、芝遺跡(5)、鴨都波遺跡(1)、四分遺跡(2 前掲写真)、布留遺跡(1)からも出土しています。大阪府下でも、銅鐸鑄型が出土した東奈良遺跡(4) 鬼虎川遺跡(3) や銅鐸片が出土した亀井遺跡(8) や池上曾根遺跡(2) など著名な遺跡からも中期段階の銅鐸形土製品が出土しています。

(参考) 小銅鐸

朝鮮半島の最古の小銅鐸は、韓国中西部の大田市槐亭洞(けじゅんどん) 遺跡の石棺墓から出土しています。小銅鐸は、高さ 11cm で上下の差があまりない筒型で鱗はなく身部に文様はありません。時期は紀元前 7~6 世紀頃で遼寧青銅器文化の系譜をもつと考えられ、細形銅剣・多鈕細文鏡・盾形銅器・剣把形銅器・円形銅器や天河石製飾玉などと一緒に副葬されています。かつては小銅鐸は馬に吊り下げた馬鐸と考えられていましたが、半島では副葬品として出土しています。国内で独自に発達した銅鐸等の祖形は半島系小銅鐸と考えられていますが、その違いが注目されています。



国内出土の小銅鐸は、全国で 50 点ほど出土しています。搬入品を除くと朝鮮半島の小銅鐸を模したもの(北部九州に出土例が多い)と銅鐸を模したものに分類され、主に鱗と文様の有無などで区分できます。中前期半には既に福岡県津屋崎町勝浦高原遺跡や熊本市八ノ坪遺跡から小銅鐸の鑄型が出土しています。

以降、近畿地方からも小銅鐸は発見されていきます。茨木市東奈良遺跡の中期中葉の溝の最低部から出土した小銅鐸(右上写真)は、朝鮮式小銅鐸に近い形状(鱗がなく楕円形の鈕の断面や型持穴や内面突帯の位置など)をもっていますが、綾杉文や鋸歯文や円文の文様を持っています。半島系小銅鐸かみるか菱環鈕式銅鐸の最古例とみるか見解が分かれています。



遺跡紹介 吉武高木遺跡～最古の王墓

1 吉武高木遺跡

(1) 早良平野 吉武高木遺跡は、博多湾に面する早良(さわら)平野の南西部(福岡市西区)に位置しています。平野は、東西 6km 奥行き 8km で背振山地(標高 1055m 佐賀県との県境)から派生する低丘陵によって東と

西辺が画され、背振山塊に源を持つ室見川が平野を貫流し博多湾に注いでいます。遺跡は、室見川中流域左岸の段丘上（標高 25～30m）に位置し東西 700m 南北 1000m（42ha）の範囲に広がっています。早良平野は広くは福岡平野の一部とされ、「後漢書東夷伝」など中国の史書に記述される奴国（中心遺跡：春日市須玖遺跡）は油山山塊を挟んで東方 13km 先にあります。また伊都国（中心遺跡：糸島市三雲・井原遺跡）は背振山地を挟み隣接しています。遺跡の周辺には、砂丘・丘陵・扇状地など多様な地形に応じ著名な遺跡が数多く散在しています。遺跡は、南のムラ・北のムラの間以南から高木地区・大石地区・樋渡地区と広がっていて、それらを合わせて「吉武遺跡群」と呼ばれています。大規模集落は、複数集落の結合とする視点で見ると集落の変遷が分かりやすくなります。

(2) 王墓 高木地区の木棺墓（3号墓）から銅鏡・勾玉・武具がセットで出土しました。3号墓は、弥生中期初頭の墳墓（3.7m×2.9m 深 90cm）で、「楽浪海中倭人有、分かれて百余国」（「漢書」地理志の燕地の条）以前のものです。残存長 1.7mの大型礫の標石があり、埋葬施設は組合せ式木棺（2.6m×0.9m）で「支石墓」の外観をもっています。3号墓では、多鈕細文鏡 1・細形銅剣 2・細形銅矛 1・細形銅戈 1・ヒスイ製勾玉 1・碧玉製管玉 95（右写真）が副葬されています。副葬品は、前期古墳と同じ構成で、三



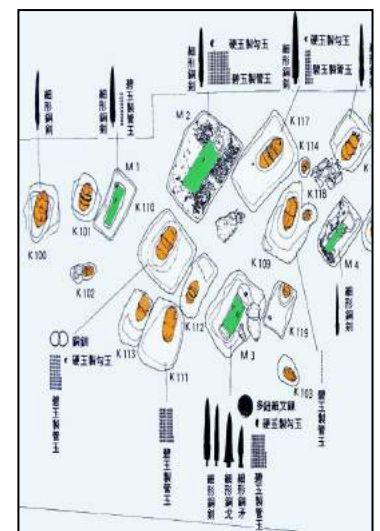
種の神器をもつ「最古の王墓」と呼ばれ、全国的に注目されています。

一方、奴国の王墓と想定されている 1899 年（明治 32 年）に発見された須玖岡本遺跡 D 地点の巨大な標石（長さ 3.6m など）下の甕棺墓からは前漢鏡（32 面以上）をはじめ銅矛（4 点）銅剣（2 点）銅戈（1 点）・ガラス璧・勾玉・小玉が副葬されています（支石墓とする意見もあります）。また、伊都国の王墓とされている三雲南小路遺跡の周溝（方形周溝墓）を持つ 2 基の甕棺墓からも同様に多くの副葬品が発見されています。1号甕棺墓では、銅鏡（31 面以上）・銅剣（1 点）・銅矛（2 点）・銅戈（1 点）や多くのガラス製の勾玉・管玉・小玉・璧片が副葬されています。何れも、吉武高木遺跡の 3 号墓よりも新しく中期後半です。今回は、遺跡の変遷を確認し、併せて「王墓」についても考えます。

2 集落の配置

(1) 集落域 遺跡は、南西から博多湾に向かい緩やかに傾斜（南西→北東）していますが、縄文後期後半に北東部の丘陵縁辺から貯蔵穴（46 基）が検出され小規模な集落活動が開始されます。

弥生期になると、前期後半から後期末にかけて集落遺構や埋葬遺構が遺跡全域に及んでいきます。遺跡全体では、生活関連遺構は竪穴住居 89 棟（前期後半～後期前半）・掘立柱建物 143 棟・土坑 194 基・溝 71 条ほどで、埋葬遺構は甕棺墓 1282 基（前期後半～後期前半）・土壇墓 18 基・木棺墓 14 基（中期初頭・後期初頭）・石棺墓 11 基（後期）で祭祀遺構 5 基（中期）が報告されています。



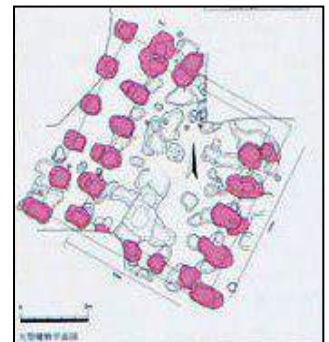
まず、前期後半には縄文後期後半の活動域の北側の遺跡北端部とその西側で集落活動が開始され、竪穴住居やその北側に 2 群の甕棺墓が確認されます。2 つの血縁集団に分かれた小規模な集落域です。その後、高木地区から北 700m の「北のムラ」は中期まで継続する生活関連遺構や 4 群に分かれる埋葬遺構（甕棺墓 209 基 木棺墓 3 基）が確認されています。

(2) 高木地区 前期末になると新たに南側の高木地区と大石地区で遺構が検出されています。高木地区では中期の掘立柱建物が中心で 44 棟が確認され中期後半には大型建物が検出されています。また、埋葬遺構も

多く確認され次に述べる多量の副葬品が出土する「特定集団墓」（前頁下写真）が出現します。中期中頃になると、高木地区及びその南側での造墓活動は終え、南側に倉庫と考えられる掘立柱建物群や土坑群が広がる「南のムラ（高木地区を含む）」となり、中期後半には生活域は最大規模となります。

① **特定集団墓** 遺跡群の南東に位置する高木地区の埋葬遺構は 570 基以上確認されていますが、そのうち副葬品を持つ特定集団墓は、東西 25m×南北 18m の範囲に 11 基の甕棺墓（金海式古段階）と 4 基の木棺墓で構成されています。北部九州では、弥生早期から前期前半まで主に朝鮮半島に祖形をもつ木棺墓や一部では支石墓もみられますが、前期後半になると甕棺墓が出現し前期末から中期はじめに大型化し金属器なども副葬されていきます。遺跡の甕棺墓はその時期のものですが、最古例の一つと考えられる 110 号甕棺墓からは既に銅製腕輪 2 点・勾玉 1 点・管玉 74 点が副葬されています。3 号木棺墓は墓群中央部の南端にあり前述のとおり多様な副葬品が発見されています。また、4 基の木棺墓には全て銅剣が副葬され、一方その配置関係から中核墓と考えられている 110・117 号甕棺墓と 2・3 号木棺墓全てに勾玉が副葬されています。多くの特定集団墓からは、朝鮮半島由来の青銅器が備わり早くからの交流が予測できます。また、特定集団墓の存在は、特定集団への権力の集中の表れとして注目されます。少なくとも、格差の無い家族墓から等質的でなくなった集団墓への推移が確認できます。

② **大型建物** 中期後半には集落域が拡大し、丘陵部には竪穴住居・掘立柱建物群（倉庫を含む）がまとまって検出されています。その中で大きな柱穴（直径 1~1.5m 深さ 70~100cm）をもつ大型建物（右平面図）が検出されました。二重に巡っていて外側（214 m²）内側（115 m²）の床面積 121 m² の高床建物（平地式建物の復元案もあり、中期初頭とする意見もあります）です。この時期は、九州北部では墓群と軸線上に配された大型建物が散見され、福岡市久保園遺跡（5×8 間）や鳥栖市柚比本村遺跡（167 m²）が知られています。大型建物の用途ですが特定集団墓（主軸が同方向）の東 50m の近距離ですので祖霊祭祀施設の可能性が想定できます。



(3) **大石地区** 中期の住居址は 1 棟のみですが土坑が多数検出されています。埋葬遺構は中期中葉を中心に後期まで継続し一部は高木地区とも結合し丘陵に沿って延長 450m の範囲に 2000 個の列状の甕棺墓（甕棺ロード）が検出されています。甕棺ロードは、金海式段階から数地点に分かれて開始されていますので、拡大した親族集団の墓群と考えられ集落内の人口増加を裏付けています。類似する甕棺墓列は、吉野ヶ里遺跡などにもみられます。

(4) **樋渡地区** 生活関連遺構は少なく、後期段階の住居や溝が僅かです。しかし、高木地区の大型建物の北 200m にある 5 世紀前半の樋渡古墳の下層から弥生墳丘墓（右写真）が発見され、南北 26m 東西 17m の範囲に甕棺墓 30 基・木棺墓 1 基・石棺墓 1 基が検出されました。中期中葉の須玖式甕棺では、銅剣や青銅製把頭飾が副葬されています。中期後半の立岩式古段階の甕棺には中国製の鏡（重圏文星雲鏡）や素環頭大刀が副葬され、中期末葉の立岩式新段階の甕棺では鉄剣・鉄鏃など鉄製武具が副葬されています。しかし、前述の奴国・伊都国の「王墓」とは時期的に符号しますが、副葬品を比較すると量的に違いがあります。



3 3種の神器

あらためて 3 号木棺墓の副葬品（前掲写真）をみます。木棺墓の右側辺に細形銅矛・細形銅剣・多鈕細文鏡

が重なって出土し、左側辺に細形銅戈と細形銅剣が並んで出土しています。銅矛と銅戈の片面には絹布が残っていたとのこと。その中の多鈕細文鏡（直径 11.1cm）ですが、その祖形は遼寧半島で BC8~4 世紀頃の粗文鏡で朝鮮半島には無文土器後期の BC4~2 世紀に出現し 48 面ほどが主に副葬品として出土しています。国内では 12 面ほど出土していますが、その中では中期初頭ですので最古級です。鉛同位体分析比では、ラインD（朝鮮半島出土遺物と共通）にあり早い時期の青銅器の特徴を有しています。また、青銅武具は何れも初現期の細形で青銅器が国内に出現した時期の舶載品（ラインD）です。なお、この時期は周辺遺跡からも青銅武具の副葬例（共通の墓制）があり、岸田遺跡（銅剣 5 銅矛 3）、東入部遺跡（銅剣 2・銅釧 1・玉類・鉄刀）、野方久保遺跡（銅剣 2）、飯倉唐木遺跡（銅剣 1 銅戈玉類）、有田遺跡（銅戈 1）などが報告されています。

4 クニの成立

中期後葉の須玖岡本D地点と三雲南小路遺跡の墳墓は、副葬品の構成や漢の冊封体制下（政治的条件）を根拠に王墓とする意見に異論はなく、一方吉武高木遺跡は特定個人墓でなく集団墓の範疇であることから消極的意見が多数を占めています。吉武高木遺跡は、前述の通り大型建物や倉庫群や甕棺墓群から一定の食料生産能力とそれを備蓄する余剰能力を持つ集団で、一定の数の親族組織によって統合された地域集団だったと想定できます。また、特定集団墓の存在から未だ階層分解する前の社会ですので、遺跡は「首長制社会」成立前段階の「部族社会」と評価できます。部族社会（クニ）のリーダーの墓を「王墓」とする呼称に倣うと、先述した早良平野（地域社会）内の青銅器類の出土例から、朝鮮半島の交流に強い調整能力（リーダーシップ）を発揮した「ビッグマン」の墳墓（王墓）と評価できます。一方、後出する須玖岡本D地点と三雲南小路遺跡の「王墓」も首長制社会前段階の部族社会の特定個人墓ですが、階層的にも分解が進行していてより強いリーダーシップを発揮した「王墓」であったと考えられます。

雑学 支石墓

弥生時代になると朝鮮半島から縄文時代と異なった新しい文化が伝来し、縄文時代の土壌墓や土器棺墓中心の墓制に加え新たに支石墓（しせきぼ）や木棺墓が登場します。埋葬形態も屈葬から伸展葬へと変わっていきます。今回は、弥生時代早期に朝鮮半島から伝わった支石墓を紹介します。支石墓は、地下に埋葬施設を構築し地上に巨石を置いた墓です。近畿地方では未発見ですが、北部九州では弥生前期にかけて数多く発見されています。そこからは、弥生文化伝来時の朝鮮半島との交流の様子が垣間見えてきます。

1 朝鮮半島の支石墓

支石墓は、バルト海や大西洋沿岸部に多くみられる巨石建造物の一種です。農耕の開始に伴い人口増加と社会的不平等が進みエリート層の墓制として誕生したと考えられています。東アジアでは、朝鮮半島を中心に中国北東部から九州地方中西部にまで広がっています。半島の支石墓は、外形によって主に3つに分類されています。板石を組み合わせた石室の上にテーブルを置いたような卓子式（国内未発見 右上写真 和順支石墓）と地下の埋葬施設の周囲に数個の支石を基石のように配した碁盤式（右中写真 糸島市志登支石墓）とに2分されていましたが、地下の埋葬施設の上を支石を使わずに上石で直接覆う蓋石式（右下写真 島原市原山支石墓 埋葬施設は土壌墓）も近年は広範囲で確認されています。



① **起源** 支石墓は、無文土器時代（半島の時代区分 BC1500～AD300 年）の初めごろに半島周辺で現れ、無文土器時代末期まで継続した墓制です。世界の支石墓の半数は半島全域にあってその数は約 4～6 万基と推定されています。韓国では、南西端の全羅南道を中心に西南部に支石墓が集中しています。最古の支石墓は、遼東半島中部の遼寧省大連市双房 2 号墓で卓子式です。中国の場合東北部の丘陵部から 300 を超える卓子式の支石墓が確認され、朝鮮半島でも北部を中心に卓子式が広まり中南部の海岸地域にまで広まります。一方、碁盤式は南部地域に多く見られます。蓋石式は遼東半島・朝鮮半島や九州地方に分布する普遍的な支石墓です。

② **内部構造** 朝鮮半島の支石墓の上石は基本的に分厚く国内より大ぶりです。内部は長方形の石室が中心で、埋葬施設は石槨・箱型石棺、木棺、土壇です。なお、半島では古来より伝統的に簡単な組合式の木棺墓と石棺墓の葬法があります。

③ **社会関係** 朝鮮半島の支石墓は、無文土器時代前期（BC1500～850 年）の後半に出現します。拡散した時期は中期（BC850～550 年）ですが、その時期は雑穀中心の農業の規模が大きくなり大規模集落も出現し青銅器も確認されています。中期後半（BC700～550 年）になると遼寧式銅剣が副葬品に加わります。当時の社会関係は、支石墓に副葬されている遺物からも推測できます。

④ **副葬品** 数基から十数基、多くは 50 を超える支石墓が列状に配置され墓群（血族を中心とする集団墓）を形成していますが、中には副葬品を多くもつ墓も出現しています。石剣・石鏃と一緒に出土する遼寧式銅剣と銅矛が注目されます。また、天河石製勾玉や碧玉製管玉や丸玉・小玉など希少材も出土し、赤色磨研土器や彩文土器（ナスビ文土器）などの祭祀具も目立っています。また、石包丁や石鎌や魚網など農具や漁具類なども副葬され、当時の生活関係が推測できます。



2 国内の支石墓

支石墓は、長崎県北西海岸部や島原半島、福岡県糸島半

島、佐賀県唐津平野や佐賀平野に集中し熊本県や鹿児島県や山口県からも発見され 600 基ほどが確認されています。弥生早期から前期と時限的に営まれ、半島とはあまり時間差がなく出現しています。そして、中期初頭からは急速に甕棺墓に代わります。

以下、代表的な支石墓を紹介し、縄文墓制の影響を確認します。まず、初現期の支石墓をみます。

① **初期支石墓～久保泉丸山支石墓** 各地域の支石墓の先後関係は、伝播ルートを確認する上で重要です。しかし、副葬品の数も少ないことから明確ではありません。ここでは、随伴する土器に注目します。支石墓（周辺を含め）からは弥生早期の夜臼式から前期の板付Ⅱ式の期間の土器が出土しています。

唐津湾を望む佐賀市久保泉丸山遺跡（右上写真 碁盤式）では、支石墓 118 基、甕棺墓 4 基など 140 基の墓域が広がっています。支石墓から出土した小型壺等の土器は、弥生早期の山ノ寺併行期から板付Ⅱ式の時期です。支石墓と時期的に併行する 2 基の甕棺墓は、縄文晩期の突帯文土器の黒川式の特徴を持つと報告されています。従って、支石墓群は黒川式に遡及する可能性があります。弥生早期の土器が出土した支石墓を幾つか例示します。長崎県小川内 9 号支石墓の箱式石棺内から出土した深鉢片が山ノ寺式期または夜臼式期とされています。玄界灘沿岸では、佐賀県五反田支石墓から 5 基の支石墓が発見され土壇上部より夜臼式土器が出土し、付近より夜臼式甕棺が出土しています。弥生早期には確実に伝来していることが分かります。

② **埋葬施設～風観岳支石墓** 内部構造（埋葬施設）には、地域差があります。玄界灘沿岸や佐賀平野では土壇が多く、長崎県は箱式石棺が多い傾向があります。風観岳の稜線にある長崎県風観岳支石墓では、35 基が

確認されています。その埋葬施設ですが、確実なものは箱式石棺 10 基、土壙 2 基で朝鮮半島に多い箱式石棺墓を主に土壙墓が混じっています。一方、宇木川左岸の丘陵部に位置する 14 基の佐賀県瀬戸口支石墓ですが、その内部構造は土壙 11 基、箱式石棺 1 基、甕棺 2 基（土器や甕棺は夜臼式）の構成です。縄文後晩期にみられる土壙墓や土器棺墓の流れを汲んでいます。なお、先ほどの久保泉丸山支石墓は全て土壙です。

③ 埋葬形態～宇久松原支石墓 五島列島宇久島の海岸砂丘にある長崎県宇久松原支石墓の 6 基ですがそのうち 3 基より 1 体の成人男性、2 体の成人女性の人骨が出土しています。抜歯痕をもつ遺存状態の良い 2 体は、下肢が屈曲した仰臥（ぎょうか）です。また、佐賀県唐津市の大友支石墓の人骨や福岡県糸島市の新町支石墓の人骨も、半島由来の伸展葬でなく仰臥屈葬で縄文墓制を継続しています。抜歯痕も確認されています。

④ 副葬品～原山遺跡 副葬品は朝鮮半島と比べると少ない印象があります。島原半島の雲仙岳南麓台地上の長崎県原山遺跡の 3 群 100 基の支石墓の副葬品として、第 2 群より管玉、打製石鏃が出土しています。他に土偶や魚型土偶や石包丁等が少量ですが出土しています。長崎県狸山支石墓や宇久松原支石墓からも同様の遺物が出土していて縄文文化の残存がうかがえます。

⑤ 人骨～新町遺跡支石墓 玄界灘沿岸の砂丘上に位置し、朝鮮系柳葉式磨製石鏃が嵌入された男性の人骨で有名な新町遺跡支石墓（右写真墓盤式）は 57 の墓数を有し、土壙を主とし箱式石棺もあり磨製石鏃や管玉が出土しています。14 体の夜臼・板付 I 式期の人骨を全体的に見て、縄文人の身体的特徴に合致する点（低身長・顔面部の低顔性など）が多いと報告されています。また、弥生人渡来説の根拠とされる山口県土井ヶ浜遺跡より出土した人骨の特徴とも異なっていました。留意したいのは、下肢に比べ上肢の発達が目立つという指摘です。その形質は、西北九州の沿岸部の弥生人、縄文人に共通してみられる特徴で、生活の大部分を漁撈を含め狩猟採集生活をおくっていた人々の存在を裏付けています。また、先述した大友人骨（右写真）のコーゲンに含まれる炭素・窒素同位体の食性分析がなされています。大友人骨は縄文人骨と同様に海洋資源の依存が高い傾向を示し、早い時期の支石墓の人骨は小型魚類や貝類の摂取が多く、次第に大型魚類の摂取量が増加していると報告されています。



⑥ DNA分析 一方、支石墓から出土した人骨のDNA分析がなされています。大友遺跡からは 150 個体の古人骨が出土していますが、支石墓 8 号墓（下部は土壙墓）の熟年女性（オオツタノハ貝の腕輪を装着）の核DNA分析（国立歴史民族博物館研究報告 228 集）では、M7a1a6と報告されていますので縄文系のM7aの形質を持っていたことが分かります。在地の縄文人が半島伝来の墓制を受け入れていたことを裏付けています。

3 伝播ルート

国内の支石墓は、上石を供えるといった外形のみが類似し、埋葬施設などは縄文墓制を持続するといった朝鮮半島とは違った独自の変化を遂げています。弥生早期に水田稲作と木製農具などを伴って渡来した人々の痕跡は、福岡平野（支石墓の分布域でない）や唐津市付近の玄海灘沿岸地域にあります。続いて前期末から中期初頭にかけては有明海沿岸地域に青銅器やガラス製品が出現しその技術を有した集団が渡来しています。しかし、支石墓の伝播は、稲作などの時期やその伝播ルートとは必ずしも一致していません。その分布域をみると、朝鮮半島南端の人々と日常的に交流を持っていた漁労の人々の痕跡がみえてきます。そこには、墓制を含め多様性を持った半島伝来の弥生文化には、多方面の伝播ルートがあったことを示しています。

（編集委員） 谷口敬子 筒井和子 万徳順一 水野日出男 宮川真由美 井上知章（文責編集員）